

# サクラ大戦～来たれ次 世代の戦士～

ユウジン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

時は平誠。高度成長期も昔の出来事となり、世界のどこかでは扮装が起きていたがそ  
れが他人事と思つてしまふ程度には大きな戦いはなく、平和な日々が続いていた。

しかし人々は知らなかつた。すぐそこまで巨大な陰謀と魔が目覚めようとしていた  
ことを……

だがそれに立ち向かう少年少女達がいる事を！

これはその悪と戦う少年少女達の戦いと成長と愛の物語。

今ここに、現代に蘇つた帝国華撃団の物語が始まる！

この小説は新サクラ大戦情報が出る前に考えていたものを、新サクラ大戦の発売が決

まりその前に書いとこうと思って書いた物になります。なのでその辺の設定はなく、全く別の世界線の話だと考えてください。

# 目 次

第一章 新たなサクラが咲き出す時 桜舞い散る空の下で	1		
帝国歌劇団	1		
光武起動	1		
魔の目覚め	1		
真の力	1		
始まり	1		
第二章 集結する戦士たち 新たな仲間達	1		
犬猿？	1		
	1		
68 60	56 46	31 22	9 1

# 第一章 新たなサクラが咲き出す時

## 桜舞い散る空の下で

「魔の活発化……か」

「はい」

「高級そ うなス ーツに身を包んだ男達が並ぶ前に、一人の女性が立つて言葉を発して いた。

「もはや猶予はありません。あの計画を実行に移させていただきたいのです」

「だが予算はどうするのかね？」

「そもそもなにか問題が起きたら誰が責任を……」

「やはりアメリカに助けを……」

「そう口々に言葉が発せられる中、ドン！と女性は机を叩き、視線を自分に集める。そして、

「言つた筈です。もはや猶予はない」とここ数年降魔の出現率が上がりつづけ、更には謎の魔操機兵も確認されております！降魔の増加は第二次世界大戦後にも見られましたがその際はGHQを介してニューヨークの華撃団が対抗してくれました。ですが今

は違います。アメリカでも同様に魔の出現が増え、とても日本にまで手を回してくれる状態ではありません。日米安全保障条約なんて何時だつて無視できるんですよ！故に今必要なのはアメリカの庇護ではない！日本独自の防衛……帝国華撃団なんです！」

そう一気に言つた女性は一人の男に詰め寄る。

「総理、ご決断を。なにか問題が起きたら私が責任をとります。出資者は既に何人か見つけています！」

「……分かつたよ。藤枝くん」

総理と呼ばれた男は、詰め寄つてきた女性を藤枝くんと呼ぶと、目の前に置かれた書類にサインをし、

「藤枝くん。これより君を帝国華撃団総司令に任命する。君には帝国華撃団に関する全ての決定権を有するがそれに対する責務を知つた上で職務に励んでもらいたい」  
その言葉に、藤枝と言う女性はしつかりと頷いたのだった。

「ねえ、あの人かっこよくない？」

「外人さんだよね？ちょっと話しかけてみたら？」

「私英語できないから無理だよ……」

そう小声で喋る少女たちの視線の先には、一人の男がいた。

歳は十代半ば程、すらりとした背丈に金髪の短めの髪型、そして碧眼から日本人ではないらしい。そんな男がサクラが舞い散る空の下立つて居ると言うのは、中々絵になる光景だ。その男の元に駆け寄る少女が一人。

「あ、あのお……」

「？」

男が振り替えると、そのいたのは腰まで伸ばした黒髪を、大きなりボンでポニー テールにした同じ年ほどの和風美少女だ。その少女はしどろもどりしながら、「ええと……はるー？いや、ほんじゅーる？ええと、まいねーむいづく」

どうもこちらにコンタクトを取りたいらしいのだが、言葉で悩んでいるらしい。それを読み取った男は笑みを浮かべて、

「日本語で大丈夫だよ？」

「……え?! 日本語喋れるんですか⁈」

普通に流暢な日本語で返事をされ、少女が眼を見開く。そんな様子に男はクスクス笑いながら、

「それでなにか用事？」

「あ、そうだ。ええと、ローア・シャトーブリアンさん……ですよね？」

そう確認してきた少女に男は、

「そうだけど……なんで俺の名前を？あ、もしかして！」

「はい！ 初めまして！ 私は真宮寺 八重。帝国華撃団より貴方をお迎えに上りました！」

「それにしてもまさか帝國華撃団からの使いが君みたいな女の子だなんて思わなかつたよ。もつとこうお堅い軍人みたいな人が来ると思つたからさ」

「私もまさか日本の上野公園の桜を見たいからつて言う理由で迎えの人が空港までいくはずだつたのに断つた人がいたつて聞いたときは驚きましたよ

？」

二人は道中そんな話をしながら、道を歩いていた。話しているうちに判明したのだが、彼女はローアの一個下らしく、そこまで年が離れているわけではないらしい。と安心したのはローア。正直、日本人は年が分かりにくい。と言うのは、きっと自分だけではないはずだ。

「それにも日本つて良いよなあ。ずっと憧れてたんだ！道も綺麗だしゴミもない！」

そうフランス在住のローアは、憧れの日本の地を踏みしめながら感激していた。だが

そんな姿を見て八重は、

「でも私はフランスのパリとか憧れちやいます。やつぱり世界のおしゃれの最先端ですし」

「パリって結構ゴミとかあつて外国人が思うほど綺麗な街じゃないぞ？」

それでもです！なんて八重に詰め寄られ、ローアは苦笑いを浮かべる。お互い、ままならないものだ。そんな中、八重は少し表情を変え、

「そう言えばシャトーブリアンさんはどう言つた経緯でここに？」

「ローアで良いよ。俺はフジエダつて人が来てスカウトされたんだ」

訂正しつつ、ローアは答える。

ある日のことだ。フランスにある自宅に突然日本人がやつて来て、自分をみるなり一

言言つた。

『君の力で日本を救う手伝いをしてほしい』

なんのことだか分からず困惑したが、ずっと憧れだつた日本に行けることもあり、すぐにおK。まあ正直その後両親と大喧嘩一步前まで言い合いになつてようやく許可を貰つたのだが、それは割愛。

とにかく日本だ。ずっと憧れてた日本だ。もうそれが嬉しくてしかたがなかつた。

日本のアニメやゲームはフランスでも大人氣で、ローアも勿論大ファンだ。日本語

も、アニメやゲームで覚えたものである。

とまあそんな感じで眼をキラキラさせて歩いていると見えてきた。一人の目的地の大帝国劇場が。しかし、

「ん？」

突如悲鳴が聞こえ、ローラが振り替えると、視線の先には道路にボールを落として、車が来てるのも気づかず飛び出した瞬間だつた。

「危ない！」

八重も声を上げる中、ローラは少し息を吸うと一瞬体が発光し、

「つ！」

「え？」

ローラは子供を抱き上げながら、地面を転がり車を避ける。それを見た八重はポカンとしていた。

なにせ、ローラは八重の隣にいたはずなのだ。なのに、突如子供の背後に出現すると、子供を抱き上げ転がつた。

いつの間に移動したのだ？というか、そもそもこの距離を気づいたタイミングから計算しても、走つても間に合わない筈だ。

そんなローラは子供に怪我はないかと微笑みかけ、頭を撫でてやつていた。それから

母親と思われる女性にお礼を言われて、

「どうしたの？」

と言つて戻つてきた。そう聞かれ、八重もいつまでもポカンとしているわけにもいかないので、首を横に振つて何でもないという。

まあ自分より先に反応したし、多分自分が反応した頃には走り出した後だつたんだろうとすることにした。

勿論。そんなわけないのだが、真相が判明するのは、もう少し先の話である。

# 帝国歌劇団

さて色々騒ぎはあつたものの、大帝国劇場に無事到着したローアは、八重に中を軽く案内されながら、支配人室を目指していた。

「大帝国劇場は第二次世界大戦時に焼けてしまつたらしく、現在はそれを立て直したものらしいですよ」

「へえ～」

そう言いながらローアはキヨロキヨロしている。舞台・売店・ホールと見て回つたが、どれも綺麗だ。八重はこここの舞台に立つてゐるらしいので、いつか見てみたいなど思いながらここが食堂です、と案内されていると、

「あら八重さん。お帰りになつてましたの？」

「あ、アツバさん！ただいま帰りました」

そう言つて、八重を食堂で紅茶を呑みながらプロンドヘアのスタイルが良い少女。アツバと呼ばれた彼女は、ローアを見ると、

「貴方が新しい人かしら？」

「初めまして、ローア・シャトーブリアンです」

ペコリ、とお辞儀間で挨拶。さつきは八重の行動が面白くて出来なかつたが、日本のマナー本みたいな奴でこうするのが礼儀とあつたのだ。だが、「全く、外国人ですら初対面の人間にたいしてこういう風に出来ると言ふのにあの人と来たら……」

とブツブツ言つてゐる。何だ?とローアが首をかしげると、アツバは慌てて、  
「R a v i d e v o u s r e n c o n t r e r。私は神崎 アツバ。シャトーブ  
リアン家の御曹司殿にお会いできて光榮ですわ」

「ありがとう。神崎家の御令嬢に会えてこつちも光榮だよ」

そうアツバとローアが言い合ふと、八重は首をかしげていた。

「ローアさんの事、アツバさんは知つてるんですか?」

「知つてるもなにもシャトーブリアン家と言つたらフランスでは何代にも渡つて続く大富豪の家ですわ」

何も知らないんですね、とアツバが言うと、八重は眼を丸くしながらこつちを見て、

「ローアさんつてお金持つたんですね!」

「俺がじやなくて先祖と親がね」

と、苦笑いして答える。実際事業やらなんやらをやつて稼いでいるのは父なのだし、折角シャトーブリアンの名前を知つてる人間が少ないのであろう憧れの日本に来たのだ。

ノビノビしたい。何てちょっとと思つたり。

するとそこに、

「騒がしいけどどうしたの？」

「レミイ！貴女も居たのね」

と八重はやつて來た銀髪の中性的な少女を見て、ローアに紹介する。

「ローアさん。こちらはレミイ・アルベルジユエ『ガチツ!』あいつたあ……」

名前を言おうとした八重だが、思いつきり舌を噛んだらしく、口を抑えて涙目になつてしまふ。

「全く、八重さんつたらダメダメですわね。彼女はレミイ・アルベルヴエ『ガチツ!』

……」

静かにアツバも口を抑えて蹲る。それを見たレミイは、少しため息をしながらも、

「初めまして。レミイ・アルベルジエッティ。宜しく」

「ローア・シャトーブリアンだ。宜しく」

とお互い挨拶。それにしても見事にさつきから女性にしか会わない。男は居ないのだろうか？

「ひゆみまへん。しはいにんひつはこのさひでひゆ……」

口を押さえながら言う八重に、思わずローアは苦笑いを浮かべながら、アツバたちに

声をかけながらその場を八重に続いてあとにし、

「こちらです」

そう言つて見せたのは、支配人室と書かれたネームプレートが扉に付けられた部屋。それから八重がドアをノックすると、

「どうぞ」

と言う返事が帰つてきたので、二人が入るとそこには二人いて、

「新しい彼も来たのね」

そう言つて一人がこちらにやつて來た。高身長でスラリとした中性的な顔立ちだ。

その人はこちらに手を差し出し、

「初めまして、名前は柏木 舞。年は18歳で一応女よ」

「見れば分かりますけど……」

舞の自己紹介に思わずローラーは突つ込むと、舞はごめんなさいと言い、

「外国人は日本人を見分けるのが苦手だつて言うしね。たまに男と間違われるし……」

まあ見分けるのが苦手なのは否定しない。しないけど流石に性別を間違えたりはない。特に美人をね、とローラーが言うと舞は少し笑い、

「リップサービスだとしても嬉しいわ。ありがと」

そう言いつつ舞は八重に紙の束から一つ取り出し、

「新しい台本が来たんだけど、どうする？」

「え！ そうなんですか？ あ、でも……」

舞の言葉に目を輝かせた八重だが、ローアの方も見る。それを見たローアが、「ここまで送つてもらえば大丈夫だよ。行つてきたら？」

「あ、ありがとうございます！」

八重は目をキラキラ輝かせ、支配人室を台本を手に飛び出す。それに対しても舞は静かに礼を一つして、部屋を出て扉を閉めた。それからローアは残った女性を見て、「お久し振りです。藤枝 撫子さん。会つたのは……もう二ヶ月前ですね」

「ええ、要請を受けてくれて嬉しく思うわ」

そう言つて藤枝 撫子とローアに呼ばれた女性はカーテンを閉める。それからこちらを見て、

「フランスにいつたときにも説明したけれど、これは強制ではないわ。その為何時でもフランスに帰る権利を持つ。それは良いわね？」

「ええ、命の危険もあるし、事件を解決しても表立つては何か報酬が出るわけでもない。ですよね？」

ええ、と撫子は頷きリモコンを手に取りボタンを押すと、壁にスクリーンが現れ、映像が流れれる。

「前にも説明したようにここ数年。急激に魔の力が世界的に伸びている。その影響か、この降魔と呼ばれる異形の怪物が日本でも増えているわ」

まあ、降魔については今じや教科書にも普通に載つてゐるから知つてゐるわよね。そう言つて撫子が映像に写したのは、確かにこの世界のどの生き物にも似つかない異形の怪物。頑張れば爬虫類の親戚となら言えなくもないが、やはり違うだろう。そう言つて次に撫子が写した映像は、その化け物と軍服を着た男達が戦つてゐる映像だつた。

「今は靈力がなくても、降魔に対し有効にダメージを与える呪弾と呼ばれる装備があるため、自衛隊や警察も降魔と戦うことができた。でもこれを使つたとしても一体の降魔を倒すのに何十人も人員を配備しなければならない。それでは魔の力が増している今対処しきれない。そこでこの度ここ首都・東京の靈的な防護の要として、帝国華撃団が復活したの」

そうして撫子見せたのは、今度は金属の人型蒸気機械……これは、

「これも知つてゐると思うけど一応説明すると、これは魔操機兵。降魔の増加とほぼ同時期に確認された新型でね。魔操機兵は降魔と違つて突然生まれたりしない。何者かの意図があつて生まれる。つまり降魔の増加も何者かの意図の可能性がある」

それが何者かであれ、自衛隊や警察では対処しきれないものが相手になる可能性が高い。そう撫子は言い、

「だからさつきも言つたように何時でも帰つて構わないわ。私は貴方に命を懸けろとは言えないし言わない。あくまでも君の善意に期待するわ」

そう言つて来た撫子にローアは、

「まあこの間も言つたように、ずっと憧れだつた日本に来れたので良いですよ？」  
と笑つてゐる。それから、

「でもなんで俺だつたんですか？俺つてべつに軍人でもないですし」

「それは君には靈力があつたからよ」

ローアの問ひに、撫子は答へながら、

「降魔や魔操機兵には呪弾等の特殊武器よりも、もつと効果的なものがある。それが靈力を纏わせた攻撃よ。靈力は基本的に人間の内面に作用するのだけど、稀に外部に放出できる人間がいる。それが貴方たち。ただ言つたようにそれができる人間が少なくてね。昔はもうちよつと多かつたのだけど、今ではホントに極少数。少な過ぎて日本の軍関係の人間ですらこの光武を動かせるほど靈力が秀でてる人は居なかつた」

撫子はそう続けながら、今度は魔操機兵とは違う機械を見せた。

「そしてこれが光武。正式名称は神崎重工製・虎型靈子甲冑。降魔や魔操機兵との戦いのために作られたもので、これを動かすにも靈力が必要なの。しかも膨大なね。ただ効率的に靈力による攻撃を行えるし、戦闘員の安全も確保できる」

撫子はそう言い、映像を消してローアを見た。

「そして、貴方が言つたように貴方は軍人じやない。それどころかこの帝国華撃団において軍人は私だけ。といつても私は書類上除籍扱いだけどね。しかし、現在世界的に降魔や魔操機兵が増えている。でもそれに対しても靈力を持つものが激減しているのよ。だからどこの国も自国の華撃団を他の国に貸したくない。だから日本でもようやく華撃団を設立したのだけど、今度は靈力を持つものが減少した影響で、さつきも言つたように日本の自衛隊や警察、それに準ずる組織の中でも光武を動かせるものがいなかつた。でも今言つたように他国の華撃団から人員を借りることはできない。だからどうするか……って考えた結果、民間から引き抜いた」

だが帝国華撃団だけじやなく、華撃団は存在は知られているが一般的には人員が誰なのかも知られていない組織のはずだ。実際にローアの住むフランスにもパリを中心活動する華撃団がいるが、どんな人なのかは知らない。

「ええ、だから秘密裏に捜索したわ。街頭インタビュー、県単位での健康診断。他にも色んな方法でね。その時見つけたのが今ここにいる八重とアツバと舞の3人。あともう2人いたんだけどそれは別の機会で良いでしよう。とにかくこの3人がいた。その時気づいたの。最初舞と今いない一人のうち一人は気づかなかつたんだけど、とある共通点があつたことにね」

そう言つて撫子が出した写真は、かなり古いもので、そこには沢山の女性と一人の男が写つていた。

「これは？」

「これは二代目……まあ実質本格始動した時だから初代とも言えるんだけど帝国華撃団・花組の写真よ」

撫子は静かに指を指す。そこにいたのは、

「八重？」

「八重じゃないわ。彼女は真宮寺 さくらさん。彼女の先祖に当たる女性よ」

そう言つて次に指差したのは髪が短めの……

「アツバで……この銀髪のはレミイだ。髪色が違うけどこつちは舞だし」

「少しわかつたでしよう？ そう、靈力は遺伝する。特に高い靈力はね。そして貴女もそう。このイリス・シャトーブリアンさんの子孫にあたる」

その日から捜索が始まつたわ。と撫子は言う。ある時を境に帝国華撃団は完全に離散しており、特に海外出身の者を探すのには苦労したらしい。勿論自分のように、住所が決まつていれば別だが、レミイは相当大変だった、と言う。

「そして幸運にも全員が靈力を持つているのが判明して集めた。ここまで言えばわかつたでしよう？ この帝国華撃団は二代目の子孫で構成された部隊なのよ。と言うか見つ

かつた子孫が二代目しかいなかつたのだけど……」

「そう言われ、ローアは納得する。のだが、

「じゃあこの写真に写っている人の子孫がみんなここに集まつてゐるんですか？」

「一部事情があつて合流が遅れているものもいるわ。でもすぐに集まるはずよ。ただ一

人だけ……欠けて居るもののがいてね」

撫子はそう言いつつ、唯一の男性を指差す。

「大神一郎さん。帝国華撃団・隊長にしてこの大帝国劇場の総支配人を勤めていた男よ。まあ帝国華撃団の解散を機に姿を消してね。その後は日本だけじゃなくてロシア、アメリカ、フランスに、ドイツとイタリア……まあ色々な国で目撃情報があつたらしいけど、未だにその子孫はわかっていない……まあ子孫が必ず良いとは言えないけど、男性でありますから光武を動かせるほどの靈力の持ち主……子孫も持つてゐる可能性はあるわ」

そこにローアは、ちょっと待つてほしいとストップを掛けた。

「そもそも……帝国華撃団はなんで解散したんですか？日本の歴史はちよつと疎くつて」

「そうね、教科書とか文献にも色々書かれているけど、実際は第二次世界大戦がきっかけよ。あの時は人形蒸気兵器だけじゃない。靈子甲冑も戦争の道具になり、その時に帝国華撃団の光武に目を付けられた。幾度となく魔の侵略を防いだ日本の光武の性能は世

界的にも高水準でね。だから軍は光武の設計図や技術者を奪い、軍人のみで構成される帝国華撃団を再編した。勿論その際の最高責任者だつた大神一郎さんは真っ向から反対。帝国華撃団はあくまでも魔に対抗するためのものであつて戦争の道具ではない……つてね。それが原因で彼は除隊され、帝国華撃団からも追放された」

そう言いながら撫子は写真を見る。

「その後の足取りはさつき言つたように掴めてないわ。そしてその後帝国華撃団は再編され、第二次世界大戦でも多数の戦果をあげた。ただ強すぎたのね。余りの強さに戦後は出した被害や責任の全てを被らされて戦犯として処刑されたらしいわ」

「どうだつたんですか……とローアは言う。そうしながら撫子はローアを見た。

「帝国華撃団もね、GHQからの圧力もあつて完全に解体。光武などの設計図も全て処分させられたらしいわ。まあ控えを当時の神崎重工の社長が隠し持つて、今帝国華撃団が使つてる光武はそれを今の技術でバージョンアップしたものよ」

「でもね、と撫子は少し表情を固くすると、

「まあ正直戦歴は余り……つて感じだけどね」

「どう言うことですか?」とローアが首をかしげると、

「装備が向上しても使う方がね……現在帝劇に所属している隊員は、一時的に離脱している二人を除けば四人。八重にアツバと舞とレミイ……この四人のうち武道経験者は

八重とアツバ。でも戦闘経験不足が否めなくてね……何とか今までに数回だけど魔操機兵や降魔を倒してはいる。でもそれ以上に周辺への被害や光武の損傷が大きすぎるのよ」

そう言つて撫子が見せてきた写真は、3体の降魔を倒すのに、周りの建物は倒壊 or 廃墟レベルにボロボロ。光武もベコベコで、確かに3体倒すのにこれでは、余りにも採算が合わない。いや、降魔3体を倒せるつてのは、とんでもなく凄いのだが、確かに他の華撃団と比べればかなり酷いものだ。

「元々一般人のみで構成されてるとはいえね。まあ君も武道は……」「全く経験ないです」

まあそれでも人手は多いにことはないんだけどね。そう言い撫子は、

「とは言えここではいつも戦いと言うことはないわ。寧ろ普段は、帝国華撃団ではなく、帝国歌劇団としての業務が殆どよ」

と言いながら、チヨツキとその他服一式をローラーに渡す。

「君にやってもらうのはモギリの仕事よ。あとはまあ今はモギリの仕事はないから普段は雑用全般つてところかしらね。詳しい内容は他の職員に聞きながらやつてちようだい。皆こちらの事情を知つてゐるから遠慮はいらないわ。あと今日はゆつくり休んで構わないから」

何て話を聞きながらローアは、  
(これが噂に聞く日本の社畜生活?)  
と思ったのは、まあ余談である。)

# 光武起動

「ふう……」

大帝国劇場に住み着いてから数日。ローアはここについた次の日から舞台の裏方の準備をさせられたり、チラシ配りをやらされたりとバタバタと動いていた。

来週からは日本の高校に通うことになるので、昼間は雑用をしなくて良くなるが、それについても皆揃って遠慮なく働かせてくる。もう少し遠慮と言うものが無いのだろうかと思う反面、実家だと出来ない経験でもあるので結構楽しいのは秘密。それを言うと仕事増やされそうだからだ。

その中扉がノックされ、

「はい？」

「あ、八重です。今いいですか？」

八重さんか、と言いつつローアは自室のドアを開ける。するとドアの前には既に八重が待機していて、

「これから夜間訓練なんですか？」「大丈夫ですか？」

「はい、と言ひながら八重に促されローアはついていくと、

「明日明後日は土日で休みですのでそういう日は夜に光武の操縦訓練があるんです」「へえ」

光武は写真や映像で見たことがあるが、実際に操縦したことはない。少し楽しみだな。そう思いつつ八重に着いていくと地下に降りていき、

「あ、ローアさんこんばんわ」

「小春さんこんばんわ」

そこにいたのは撫子と昼間は売店の売り子をしている四季 小春（しき こはる）（20才）。彼女も帝国華撃団のメンバーで、主にバツクアップを行うらしい。因みに、

「ローアさんこんばんわ」

「ばんわ～」

「わ～」

上から順に千夏、秋菜、冬美とおり、見た目が同じな四つ子である。

正直、腕につけている腕章の文字を見ないと全く見分けがつかない。因みに主な業務はそれぞれ書類整理や来客の対応に備品の発注等々。

と言うわけで余談はここまでにして地下にあるトレーニングルームに訪れた訳だが、地下に作られているためか結構広い。そしてそこには、昼間自分に雑用をたっぷりと言

い付けてきた裏方達等もいるし、こうしてみると結構大帝国劇場にはたくさんの人間がいるようだ。

「あらー一人とも。遅刻ですわよ」

そこにガシャガシャ音を立てながらやつて来たのは、一機の光武で声からして恐らくアツバだ。

更に、

「これで全員ね」

「……」

奥からガシャガシャと光武がやつて來たが、声で判断する限り舞とレミイだろう。

「じゃあ私の光武を持つてきますね」

「あ、うん」

八重がいくのを見送り、ローアは撫子を見た。

「あれが帝国華撃団の光武ですか？」

「ええ、神崎重工製靈子甲冑・光武。武装や塗装はそれぞれを反映してるけど殆ど同一の機体よ。まあ乗り手に合わせて少しチューニングは施されてるけどね」と言わされて見てみると、確かに舞は黒でアツバは紫。レミイは青で今來た八重はピンクの塗装が施してある。

「そう言えばローア君は、パリの光武を見たことがあるのよね？」

「ええ、しかし結構似てる所もありますね」

「そう言うローアに、撫子は苦笑いを浮かべて、

「元々靈子甲冑の技術は日本が一番進んでてね。パリの光武も最初は日本と共同で開発したものでそこから発展して、るから似てて当たり前よ」

「あ、そうなんですか」

ま、今じゃ日本は世界で一番靈子甲冑の研究が遅れている国になつたけどね。と撫子は肩を竦めた。それから、

「そうそう、取り敢えずローア君のはまだ光武が完成していないから今日は靈力量の検査とかをするわね。これが取れないと光武の仕上げが出来ないのよ」

「良いですけどどうやって？」

ローアがそう問うと、撫子はトレーニングルームの隅にある光武を指差す。それはあちこちの塗装が剥げた少しボロつちい光武で、

「元々ニューヨークの華撃団が使つてた旧式の光武よ。本当なら光武はさつきもいつたように乗り手に合わせてチューニングするんだけど操作を覚えたり靈力量の検査とかならこれで大丈夫だからね」

〔成程〕

ローアはそう言いながら旧式光武に近づき、

「ええと、どうやつて乗れば?」

「そこの横についてるボタンで乗り口が開くわ。後は乗つたら自動で閉まるから中でロツクしてね」

と言われ、それに従うと確かにスイッチがあり、それを押すとプシュっと言う音と共に乗り口が開く。

「よつと!」

ローアは掛け声と共に中に軽快に乗り込んだ。そして入り口が閉じると、

「それじゃローア君。まずは右下の赤いスイッチを押して頂戴。そうすれば起動するわ」

「これかな」

とローアはスイッチをいれると、目の前の画面が光り、光武から見た視界が映る。意外と視界は広い。

「それじゃローア君。画面に光武の操作方法を出すからそれに従つて少し動いてみて」「了解」

そう答え、ローアは画面のチュートリアルに従いながらまずは歩いてみる。ぎこちなう、ガチガチと変な動きだが、一応歩けてはいるようだ。

「結構難しいな……」

「慣れれば結構複雑な動きもできますよ？」

八重はそう言つて腰に装備されている刀を抜くと、ビュビュー！と眼にも止まらぬ早さで二回刀を振るう。

「おお！。すげえ」

「これでも北辰一刀流免許皆伝ですからね」

フフン、とドヤ顔してそうな八重の所に、

「そう言えばローラはどんな武器にするのかしら？」

「俺の武器？」

それぞれ使う武器は違うからねと言いつつ、舞は光武に装備されていた銃を見せる。

「私はこの拳銃と背中のライフルが武器だし、八重は刀でアツバは薙刀、レミイはランスよ」

「ううん……」

そうは言われても、今まで武器を振り回すような生活をしていないので、全く想像がつかない。

「皆はどうやつて決めたの？」

ローラは悩んだ結果、皆に聞いてみることにした。それに対しても皆は、

「私は剣術が得意でしたので」

「私も元々神崎風塵流薙刀術の免許皆伝でしたから」と言うのは八重とアツバ。だが舞とレミイは、

「色々試して一番手に馴染んだのが銃だったのよ」

「同じく」

そんな感じで全く違う理由だ。とは言え何かしらの武術を修めてないローアは、案外そつちと同じく色々試して手に馴染むのを探す方が良さそうだ。

「ローア君。そろそろ降りて良いわよ」

「あ、はい」

その中撫子の指示が届き、ローアは光武の電源を落として降りる。それから撫子の元に行き、

「どうでした？」

「そうね。男性としてはかなり高い靈力だつたわ。初めてあつたときも軽くは調べたけど予想以上ね。これなら光武の操作も問題ないでしょう」

よつしや、とローアはガツツポーズ。

「それじや次は全員でフォーメーションを確認しましそう。ローア君は取り敢えず見学しててね」

「はい」

それから撫子はそう指示し、ローア以外の皆でフォーメーションや全体の動きの確認を行う。

そうして、その日の夜は更けていったのだが、一方別の場所では、  
「さて、準備は完了した。これより計画を実行に移す」

『はっ！』

暗闇の中にいる男は、その姿は分からない。だが声音的に40半ばくらいだろう。そしてその男の前には四人の男女がいた。

四人はそれぞれ龍・虎・鳥・亀を模した面を着けており、その体からは異様なオーラを放っている。

「最近帝國華撃団が復活したようだ。だが関係ない。お前たちも次から前線に出る。それならば返り討ちにすることなど造作もないだろう？」

「お任せを。所詮は年端もいかぬ子供でしょう」

そう答えたのは虎の面を着けた大柄な男。それに対して鳥の面を着けた女が、

「何を！」

「やめないか！」

虎と鳥の面をそれぞれ着けた二人は喧嘩になるが、龍の面を着けた男が一喝して止めた。それを見た男は、

「ふむ。良し次の襲撃作戦。お前が行け、青龍よ」

「は！必ずや貴方のお役にたつて見せましょう」

そう青龍と呼ばれた龍の面を着けた男は、膝をつきながらもそう答える。

こうして、ローア達が気づかぬ間にも、悪意が忍び寄っているのだが、それを知るの  
はまだ少し先の話だ。

# 魔の目覚め

「おはよう八重……」

光武の訓練があつた次の日の朝。休日のため少し寝坊して起きてきたローアは、一階にある食堂にやつて来ると、丁度八重がお茶を飲んでいた。

「あ、おはようございます」

二人は挨拶し、ローアは食堂に調理場から持つてきたご飯や味噌汁にオカズ諸々を持つてきて、

「いただきます」

と食べ始める。それを見た八重は、

「ローアさんつて箸を普通に使われてますね」

「ふふくん。日本には郷に入りては郷に従えつて言う言葉もあるからね。箸の使い方を覚えたんだ」

そう言いながらご飯を口に運ぶローアに八重は少し笑つて、

「ローアさんつて思つたんですけど結構日本オタクですよね」

「日本のアニメやゲームはフランスでも人気だからさ。いやあ、今でも少し実感がわ

かないもん。ずっと憧れだつたからね。日本はさ」

ローアはそう言つて最後の一囗を放り込む。すると、

「それでは折角ですし今日はローアさんに東京案内しましようか?」

「え?」

「他の皆はそれぞれ用事があつたらしくて居ないんですよ。なので手持ち無沙汰だつたんですけどローアが良ければ案内しますよ?」

八重のそんな提案に、ローアは考えてから、

「じゃあお願ひしようかな」

「そうですか。じゃあ今からだと……11時集合で良いですか?」

ああ、大丈夫だよとローアは答えると八重は席を立つて準備してきますねと走り去つて行く。

(こつちも急いで食べて準備するか)

それを見送ったローアは少し急いで食事を終わらせたのだつた。

「いやあ、良い天気だなあ」

「そうですね」

お互い支度を終えたローアと八重は駅を目指して歩いていた。

「それにしても八重。その桜色のワンピース凄く似合ってるね」

「そ、そうですか？」

そんな中突然のローアの言葉に、八重は照れながらも礼を言う。

「八重つて結構そういう色の服や小物持つてるから好き何だうなっては思つてたんだけどさ。八重の大和撫子の雰囲気と桜色つて凄くマッチしてるよ。元々美人だけど今日は特に綺麗だ」

「口、ローアさん？そんなに冗談でも誉めても何も出ませんよ？」  
「いやいや、冗談じやないって」

ローアがそう言つて誉めちぎると、八重は顔を赤くしながら少し眉を寄せて、

「ローアさんつて意外と軟派なんですね」

「そう？女性を誉めるつてのは普通じやない？それに嘘言つてる訳じやないし」

嫌だつたら辞めるけど？ そうローアは言うと、八重は嫌ではないんですけど……と言う。嫌と言うか、照れてしまう感じが強いようだ。そんな中、

「それで最初はどこ行こうか」

「じゃあまでは浅草に行きましょう」

八重は気持ちを入れ換えてそう提案し、ローアは頷く。

それから地下鉄に乗つて暫し揺られ、八重に案内されて着いたのは浅草の雷門。真つ赤な門をくぐり抜け、中には所狭しと店が立ち並んでいた。

「凄い沢山あるなあ」

「ここなんかは美味しいお店も多いんですよ。あとここ近くにある高村屋つて言う煎餅屋さんもおすすめですよ？」

食べ物ばっかりだね。とローアは笑い、八重はハツとなつて頬を染める。それを見てローアは、

「じゃあ八重オススメの美味しいお店に連れてつてよ」

「そうですか？じゃあまでは……」

と、八重が案内しようとしたその時！

『つ！』

ドン！と大気が震え、背後で爆発音が起きた。

ローアは咄嗟に八重を抱き寄せ、爆発音の方角から庇うように立つと、その方角を見る。そこに居たのは……

「魔操機兵……」

見上げるほど大きな鋼鉄で出来た感情の感じられない姿に、ローアは無意識に寒気を覚えた。すると、

「あ、あのローアさん。大丈夫ですので……」

「ん？ ああ、ごめん」

八重に言われ、ローアは彼女を解放。そしてさつきまで買い物や観光を楽しんでいた人々が、悲鳴を上げる中二人が魔操機兵を見ていると、魔操機兵は巨大なツボのような物を設置したかと思えば、

「なんだ！」

突如逃げ惑っていた人々が地面に膝をつき、突然苦しみだしたのだ。

「だ、大丈夫ですか!?」

「う、うう……」

八重が慌てて近くの人に駆け寄るが、踞つたまま動かない。するとそこに他の魔操機兵とは明らかに違い、龍をモチーフにしたらしき造形の魔操機兵が現れた。

「ほお、魂喰いが効かないほどの靈力を持つものが今の世にも居たとはな。まあ良い、【怨】よ！あのガキどもを殺せ！ただし周りの人間を巻き込むなよ！大事な贊なのだからな！」

『ギイ！』

そうして、ローア達は知らないが、青龍と呼ばれていた男に命令された、怨と呼ばれた魔操機兵達は、ローア達の方を見ると走り出してくる。

「八重！」

「え？」

それを見たローアは、八重の手を引くと、迫り来る怨の手にあつた刀が振り下ろされる中、突然姿が消える。

「む？」

龍をモチーフにした魔操機兵に乗つていた青龍は中で眉を寄せながら、その視線を横にずらすと、そこには八重の手を引いて走るローアの姿がある。

（テレビポートか。だがあれは余程靈力が高くなければできないはず。あの小僧から感じ

る靈力は並程度だが……）

そう青龍が思つてゐる間にも、ローアは八重の手を引いて怨達から逃げる。すると、八重の携帯が鳴る。

「はいもしもし！」

『八重！ いまどこにいるの？』

そう電話越しに叫ぶのは撫子で、八重は今雷門にいること、更に謎の魔操機兵に襲われていることを伝えた。

『成程……分かつたわ！』とにかく貴方達は雷門の隠し通路から地下に来てちようだい』  
すると撫子が言つた直後、ローア達を後ろから追いかけていた怨の頭が銃声と共に吹き飛ぶ。

「え？」

ローアが驚いて銃声が聞こえた方を見ると、黒がパーソナルカラーの光武が銃を構えている。アレは昨晚見た舞の光武だ。更に、

『帝国華撃団！ 参上！』

と、舞に続いてアツバにレミイの二人が登場。  
「二人とも！ このまま行つてください！」

「ありがとうございます！」

アツバに見送られ、八重とローアは更に奥に向かつて走る。

「結構一般の人もいるね」

「二人とも、八重もすぐに合流できると思うけどまずは一般の方を影に避難させながら、あの周りの魔操機兵を撃破。その後に、リーダー格と思われる魔操機兵を叩くわよ！」  
「それでは行きますわよ！」

「まさか雷門の所に、こんな隠し通路があつたなんて……」

「こういう隠し通路は東京中にあるんです」

そう言いながら二人は少し開けたところに出ると、そこには線路が敷かれておりその上には……

「電車？」

「はい。皆さんが何時も帝劇にいるとは限らないので、有事の際には各地にあるこの隠し通路に来て、この【風来丸】に拾つてもらつてから目的地に全員で向かうんです」

そう八重は案内しながら、風来丸に乗り込むと、中には撫子や四姉妹がいた。

「二人とも、無事で良かったわ。それで八重、悪いけどすぐに出撃して」

「はい！」

八重は撫子の指示に頷き、別車両にすぐに移動。移動した先には様々な機材が置かれているが、その先の車両を幾つか越えていくと、光武が置かれている車両がある。その車両に置かれている自分専用光武の隣にあるポットに入った。

ブシュ！と一瞬蒸気が出て、ポットから出ると、八重の服が変わり戦闘用の服になつている。

それからスイッチを押して光武の乗り口を開けると、乗り込み光武を起動。そして風来丸から飛び出していった。

「ヤア！」

「ハア！」

アツバの薙刀とレミイのランスが怨を破壊し、  
「こつちです！」

舞が一般人を避難させながら、銃を撃つて怨を擊破。それを見た青龍は、  
「成程。流石に場慣れしてきたか……こうなるともつと怨の数と種類を揃えなければな  
らないか」

「よそ見は禁物ですわよ！」

そこにアツバが薙刀を青龍に向けて振り下ろす。だが、

「だがまだ弱い！」

「きやあ！」

青龍の魔操機兵は腰の刀を抜くと、アツバの薙刀を弾き、そのまま切り返して彼女の光武の腕を切り落とした。

「なつ！」

アツバは慌てて薙刀を切り落とされていない方の腕で持ち、距離を取る。

「ショット！」

「ふん！」

すると舞が背中に背負っていたライフルを構え、青龍に発砲。だが、青龍は刀を振るつて一刀両断した。

「そんな……」

「どんなに速くても真っ直ぐしか飛ばないからな」

そう青龍は言い、舞に向けて走り出す。

「くつ！」

舞は銃を構えて発砲しまくるが、それを全て弾き落とされ、

「た、弾が……」

すぐに弾切れを起こし、舞は慌てて弾をリロードしようとするが、弾を落として拾い

直そうとしている間に、青龍との距離を詰められる。

「させない！」

だがそこにレミイが舞と青龍の間には入り、ランスを突き出す。

「ちつ！」

それを青龍は刀で受け止め、鍔迫り合いになる。更に、

「レミイ！そのまま抑えてて！」

「むつ！」

八重が腰の大太刀を抜いて居合い抜きの要領で青龍を切る。

「ぬう！」

咄嗟にレミイの槍を弾いて下がるが、少し切られたようだ。バチッと火花が散る。

「成程。まだいたのか」

だが致命傷ではなかったのか、特に動きに変化はない。それどころか、

「まあ良い、いつまでもお前達と遊んでいる場合ではない。あの御方の大願のためにもな」

そう言つた青龍は、刀を掲げるとそれを中心に、おどろおどろしいオーラが集まる。

「闇に巢食いし暗黒の龍よ。我が呼び掛けに応え、今こそ森羅万象を喰い散らせ！」

その言葉と共に、青龍の刃から黒い龍が何匹も飛び出し、八重達に襲いかかつた。

『キヤアアアアアアアアアアアア！』

「八重！皆！」

一方その頃、ローア達は風来丸にあるディスプレイから、雷門の監視カメラを使って八重達の戦いを見ていた。

「全員の靈子エンジン出力が大きく低下。このままで駆動率が30%を切ります！」

「今の爆発で搭乗者もダメージを受けています。このままでは彼女達の身に関わります

！」

そう叫んだのは小春と千夏で、撫子は眉を寄せて険しい顔になる。それを見たローアは、

「もう光武はないの!?」

「え!?ええと一応皆さんの光武に何かしらの異常があつたときのために、予備として昨晩も使つた検査用の光武が……」

ローアに詰め寄られ、秋菜は驚きながらもそう答える。それを聞いたローアは後ろの車両に行こうとし、

「待ちなさい！貴方が行つたところで何もならないわ！」

撫子が叫びながら、ローアの腕を掴む。だが撫子の方を振り替えると、

「俺が日本に来たのは……誰かが戦つてゐるのに自分だけ安全な場所にいるためじやない！」

と言つて撫子の腕を振りほどき、後ろの車両まで一気にテレビポートしながら移動。そして昨晩も使つた旧式光武に乗り込むと起動していると、

【ローア君！】

「ああもう！何言つたつて出ますからね！」

撫子の通信にローアが怒つていると、撫子はそうじやないと言い、

【良いこと？それは旧式だしメンテナンスだつて最低限しかしてないの！だから絶対無

茶しないで！第一目標は全員の救助よ！」  
「……了解！」

ローヤはニッと笑いながら、車両から飛び出す。光武でも余裕で通れる広さ道を通り、外を目指して走り出す。  
(八重、皆……今行くぞ！)

# 真の力

「う……うう」

【皆！聞こえてる？返事をしなさい！】

撫子さん？と八重は眼を開けながら答える。それからさつきの攻撃で割れているディスプレイを見ると、青龍がこちらに歩み寄つてくるのが見える。「と、とにかく動き出さないと……」

と八重が光武を動かそうとした次の瞬間、

「だあ！」

「ん？」

八重の光武を飛び越え、旧式の光武が飛び蹴りを放ってきたのに少し驚きつつ青龍は横に跳んで避ける。

「おいおい、出てくるなら一回で全員出てこいよ

「うるせえよ」

と言ひながらローアは、八重達に近付くと、

「皆、大丈夫？」

「ロ、ローア？」

舞が苦しそうに声を出す。そして他の皆も意識を取り戻したようで、次々と体とか、光武の機体を起こしていた。

それからローアは青龍を見ると、

「しかしそれは旧式光武か？余程金がないのか……」

だからと言つて加減はしないがな。青龍はそう言つて刀を手に走り出して来た。それを見たローアは、

「八重！刀借りるよ！」

「え？」

咄嗟に八重の光武の手から刀を取り、青龍に向けてブン回す。しかしそれを青龍は軽く止めると、

「お前素人だな？刀それはオモチヤじやないんだぞ？そんな棒でぶつ叩くみたいな振り方をする奴があるか」

青龍そう言つて刀を捻ると、ローアの光武が大きく体勢を崩してしまった。そしてその隙を見逃さず、青龍は流れるように刀を振り上げ、ローアの光武の首めがけて振り下ろすが、

「む？」

刀が当たる直前、ローアが光武」とテレポートして避けた。

(今 の テ レ ポ ー ト …… そ う か 、 乗 っ て い る の は さ つ き の 小 僧 か 。 そ れ に 今 の で 気 づ い た  
が あ の 小 僧 …… 普 段 は そ こ ま で じ や な い が 、 い ざ と い う と き に 精 力 が 爆 発 的 に 增 幅 す  
る 。 元々 精 力 の 出 力 量 は 感 情 に 左 右 さ れ る が 、 そ の 振 り 切 つ た 瞬 間 の 量 が 尋 常 じ や な  
か つ た )

恐 ら く 普 段 は 無 意 識 か 意 識 的 に か 分 か ら な い が 抑 え て い る ん だ な 、 と 青 龍 は 結 論 付  
け 、 ローア に 向 け て 刀 を 構 え 直 す 。

「 な あ ! な ん で こ ん な こ と す る ん だ ! ? 」

そ な な 青 龍 に ローア は 問 う 。 ま あ 正 直 に 言 う と 、 八 重 達 が 漸 く 立 ち 上 が つ て こ つ そ り  
撤 退 行 動 に 入 り 始 め た の を 見 て 、 そ つ ち に 意 識 が 行 か な い よ う に 気 を 引 い て い る だ け  
だ 。

し か し 、

「 お 前 に 答 え る 必 要 は な い 」

と 言 つ て 刀 を 振 る う と 閻 の オ ー ラ が 斬 撃 に 変 化 し て 飛 ん で い く と 、 こ つ そ り 移 動 し  
て い た 八 重 の 光 武 の 体 を 切 り 裂 く 。  
「 キ ャ ア ! 」

『 八 重 ( さ ん ) ! 』

そのまま地面に転がった八重を庇うように、皆は前に庇うように立ち塞がつた。

「お前！」

ローアはそれに怒りを爆発させ、青龍に突っ込む。

「愚か者が！」

それを青龍は刀で受け止め、鍔迫り合いになつた。だが、  
「なつ!？」

青龍が驚愕するのも無理はない。何せ鍔迫り合いを始めたその後、ローアの乗つている光武が目が眩む程の発光。

ローアの爆発的な速度で上昇していく靈力に、光武の靈子エンジンが反応した結果なのだが、ここまで反応が出るのが余程の靈力量じやなければ起こらない。

それを見ていたのは、撫子達の方もで、

「靈子エンジン許容範囲を超過！ 110……120……130%！ まだ越えます！」  
「靈子エンジンがオーバーヒートしています！ このままで光武が持ちません！」

秋菜と冬美が叫ぶ中、撫子はローアに、

「ローア君！ 今すぐやめなさい！ このままだと光武が持たないわ！」

しかし一方戦闘中のローアは、

「ウオオオオオオオオ！」

抑える所か更に靈力を爆発させ、

「ラア！」

「ぐお！」

そのまま押しきつて強引に腕を切り落とし、相手の刀を奪つた。そしてそのまま、「これはアツバの分！そしてこれは舞！」

「つ！」

二刀流で青龍を斬る。だが終わりじゃない。一本の刀で滅多斬りにしていく。

「レミイの！それに巻き込まれた人々の！そして八重の分だああああああああああ!!!!」

斬つて斬つて斬りまくる。その間に光武のあちこちから火花が散つていき、光武の全身にヒビが入つていく。

「ぐうううううう！」

光武の内部も火花が散り、小さな爆発が起き始めた。

「負けるかああああああああああ！」

ローアの咆哮。それと同時に光武が靈子エンジンの負荷が限界を超えた影響で大爆発を起こし、

「ローアさん！」

八重が悲鳴に似た叫びを上げる。すると、

「あちち！」

テレポートでローアが飛び出してきた。

「あつぶねえ……もうちよつと遅かつたら死ぬとこだつた」

「大丈夫ですか!?」

皆はガシャガシャと駆け寄り、ローアは埃を払いながら立ち上がる。

「大丈夫大丈夫。まあ、流石にこれは倒したんじや……」

ローアはそう気を抜く。だが、

「成程……油断するもんじやないな」

『つ！』

立ち上る黒煙と炎の中には、ボロボロになつた青龍の魔操機兵が立つていた。すると落ちていた自分の刀を拾い上げて鞘に戻すと、魔操機兵が霧のように消え、青龍自身が出てくる。

「我が名は青龍！ 黒華会四天王の一人！ 小僧、名を聞こう」

「ローア……ローア・シャトーブリアン！ 帝国華撃団の一員だ！」

ローアははつきりそう答える。それに対しても青龍は、

「シャトーブリアン？ 成程……そう言うことか。まあ良い、その名は覚えた。いずれこの決着は改めてつけてやる！」

青龍はそう言い残し、自身も霧に姿を変えて消えてしまう。そして今度こそ全身から力を皆は抜いて、

「敵は帰つたのか？」

「た、多分」

八重の答えを聞きながら、ローアはそのまま地面にへたりこんだ。今頃になつて恐怖を自覚してしまつたらしい。しかし、

「ローアさん。まだ終わつてませんよ？」

「え？」

ローアはポカンとしながら振り替えると、皆は光武から降りてきた。そして、「戦いが終わると帝国華撃団は約束の締めがあるんです」

「へえ？ どうするの？」

ローアは立ち上がり八重に問うと、じやあ合わせてくださいね？ と言い、『せーの！ 勝利のポーズ！』

皆はくるりと回つてビシツと決めポーズ。そして、

『決め！』

「……」

ローアはその光景を静かに見守つていた。

「ちょっとローアさん！ノリが悪いですわよ！」

「え？ 今やるの？！」

「意外とやると楽しいわよ？」

「じゃあもう一回やろうか」

アツバに怒られ、舞とレミイに押されてローアも強制参加である。

「い、いや良いって！」

「そう言わずに！ それじゃもう一回！ セーの！」

ローアは逃げようとするが完全に捕縛されて、八重はそんな様子を見ながら笑つて音頭を取つた。

一方撫子は、椅子に座り込んでその様子を雷門の監視カメラで見ながら、  
「皆、監視カメラの削除をよろしくね」

『はい！』

そう指示をし、撫子は思案に耽る。

ローアの一件は想像以上だった。まさか彼にここまで之力があつたとは……だが嬉しい誤算だ。しかし、

「黒華会か」

恐らくここ最近の謎の魔操機兵は恐らく黒華会の仕業だろう。そう考へると、

「まだ戦いは始まつたばかりね」

「これは急いで他のメンバーも召集するべきだ……撫子はそう考えつづいると小春が、  
「総司令！・テレビ局の記者が集まり始めています！封鎖を無理矢理乗り越えて来そうです！」

「またマスコミの連中ね……」

撫子は頭を搔き、通信機をオンになると、

「皆！急いで帰投して！・テレビ局が来たわよ！」

『え？』

一般的に正体が秘密の帝国華撃団なので、テレビに光武が写るくらいならまだしも正  
体がバレないように取材が来ても逃げるのが鉄則……と言うのは世界的にどことも同じ  
である。

なので、

「ローアさんこっちです！」

「え？」

八重達は光武に飛び乗ると、八重が光武でローアをお姫様だっこにし、ローアに若干  
恥ずかしい思いをさせながら皆で逃走。

「あ！あそこよ！逃がすな！」

と後ろで聞こえるが、皆はそのまま隠し通路まで走るのだつた。

# 始まり

「大丈夫ですか？」  
「うん……」

青龍との戦いから次の日。ローアはげつそりとやつれていた。

理由は単純。戦いから帰つてその日はすぐに休めたのだが、次の日の朝から早々に撫子に呼び出され、クラクラするほど怒られたのだ。

理由は先日の戦いで、安全第一だつたのを危険な一騎討ちに臨んだ上に、光武を爆発四散させたのだ。旧式の使い古された中古品とは言え光武だつてタダじやない。と言ふか高価なものだ。それはもうかなりこつてり絞られた。

その為かげつそりとやつれたローアは、食堂のテーブルに突つ伏して居たところに、八重がちようどやつて来て心配そうに顔を覗き込んでくる。

「まあ無茶した俺が悪いんだけどさあ」

「でもあの時助けてくれて嬉しかつたですよ?」

八重はそう言って笑みを浮かべる。それを見てローアも少し笑みを取り戻し、

「まあ、八重が無事でよかつたかな」

「ローアさんも『無事で何よりです』

そう言つて二人は笑い会う。すると、

「邪魔だつたかな？」

「ん？」

見ながらそう言葉を発したのはレミイだ。それを見たローアは、

「そうだね。せつかく一人で仲良く話してたんだけど」

「ちょ、ちょっとローアさん!？」

顔を赤くしながら言う八重と顔色ひとつ変わらないローアと言う、真逆の反応を見ながらレミイは八重を見て、

「まあ、イチャイチャも良いけど八重はそろそろ舞台の練習だから来てね?」

「い、イチャイチャなんかしてないわ!」

八重はレミイに詰め寄るが、それをスルーしてレミイはそのまま行つてしまい、それを追いかけて行つてしまう。ローアはそれを見送り、手持ちぶさたで食堂の窓から外を見る。

青龍と名乗つた男は言つていた。いずれ改めて決着をつけようと。

恐らくまたいつか戦うことになる予感がする。だがその前に強くならなければならない。そうしなければ、勝つことはできないだろう。昨日のはラツキーパンチにすぎな

いのだから……

そう思いながらローアは拳を作る。次会つたときは、実力で勝てるようになろうと。そして決意を新たにし、ローアは窓から離れるのだった。

「まさか貴方がやられるなんてね。青龍」

「朱雀。わざわざ嫌みを言いに来たのか？」

腕の傷を抑えながら、青龍は隠れ家にいたのだが、ニヤリとしながら朱雀がやつて來たので、不機嫌そうに返す。

「それにしてもそこまでの使い手がいたのかしら？今までの帝国華撃団の戦いを見ても貴方がそこまで苦戦するとは思えないのだけど？」

「新しい奴が居た。そいつが想像以上でな。それとそいつはシャトーブリアンと名乗つた」

シャトーブリアン？と朱雀は顎に手をやり、

「確か帝國華撃団の初代及び2代目に同じ姓の奴がいたな」

「恐らく血縁者だろう」

もしかしたら今の帝國華撃団には他にも昔の華撃団の血縁者がいるかもな。と青龍は言いながら立ち上がり、

「だが次は勝つ。あの小僧にはこの借りを必ず返して見せる」

そう青龍は言いながら、奥へ消えていった。

こうして、長い因縁が生まれるのだが、その因縁の結末は……まだしばらく後に語る  
としよう。

## 第二章 集結する戦士たち 新たな仲間達

「疲れたあ～」

校門を通り、ローアは深呼吸しながら歩き出す。すると、

「あ、ローアさん」

「ん？ ああ、八重。お疲れ様」

駆け寄ってきた人物に、ローアは笑みを浮かべてその方を見た。

「学校には慣れましたか？」

「まあね。ただちよつと授業で分かりにくい日本語とかあるかな」とローアは言う。

日常会話に問題がないため分かりにくいが、それでも分かりにくinessがつたりして、苦労するところもあるらしい。

「あと授業の進み方も向こうとは違うからね～。やつぱり文化の違いつて大きいよ」

そう言いながらローアはスマホを弄り、

「メールですか？」

「うん。クラスの可愛い子と連絡先交換したからさ～。皆可愛いてまいっちゃんやうよ

ねえ。うちの高校美人多くない?」

「……」

八重はジト目でローアを睨み付けていたが、画面に夢中のローアは気づいていない。

「ローアさんは可愛い女の子は口説くのマナーとか思つてそうですよね」

「そんなまさか。可愛いと思つたり良いと思えた所をそれを相手にちゃんと伝えるようにしているだけだよ」

なんだかなあ……と八重はため息を吐く。どうも軟派な人なんだよなあ……と八重は思う。しかし、

「八重も可愛いよね。特にこの黒髪が日本人的で綺麗だ」

「……」

こう言われて悪い気はしない。悪い気はしないがこの人はこういう人だからなあ。でもなあと八重は悶々としてしまう。すると、

「ん?」

スマホの画面を見ながら辺りをキヨロキヨロしている眼鏡の少女が、ローアの目に入る。

「大丈夫ですか?」

「は、はい!」

ローアはその少女に駆け寄り、声を掛けれる。しかし突然外国人の男に声を掛けられたせいか相手は驚いていた。そういう風に困つてゐる相手に平然と行けるところが格好いいんだけどな、と八重は思いながら自分も駆け寄り、

「驚かせたらすみません。なにかお困りでしたので声を掛けさせて……つて！」

『ああ！』

事情を説明。と思つたら、相手とほぼ同時に声をあげた。ローアが首を傾げると、

「八重はんやん！」

「紅葉じやない！作業着姿じやなかつたから分からなかつたわ！」

どうも知り合いだつたらしい。キャーキャー言いながらお互いハイタッチ。すると

紅葉と呼ばれた少女はこつちを見て、

「もしかしてあんたがローア・シャトーブリアンはん？」

「あ、うん。そうだけど……」

何故知つているのか？そう思つてからそう言えば八重と知り合つた。と言うのを考えると、もしかしたら帝国華撃団の関係者？と思い至つた瞬間。

「やつぱりあんただつたんやな！うち可愛い子に無茶させて壊したつちゅうアホは！」

「はい？」

なんの話？と首を更に傾げてしまうと、

「とぼけたらあかん！うちの可愛い可愛い大切なもんを好き勝手にやつて壊して爆発四散やと？！うちがどんだけ泣き腫らしたと思つてん！」

「え？え？え？」

「爆発四散？」と言われて一つ思い至つた。それは、

「もしかして旧式光武の事？」

大声で言うわけにいかないので、こそこそ話すと紅葉は頷き、

「うちがおとんに初めて全部のメンテを任せて貰えた大切な機体だつたんや。なのにあんたが……あんたがあああああああ！」

「ぐえ！く、くるしい」

ちよ、ちよつと紅葉！と八重は慌てて紅葉をローアから離し、  
「待つて落ち着いて？周りの目がね？」

「あ……」

紅葉はコホンと咳をして、

「初めまして。うちは釧灘くしょなだ 紅葉や。八重はんと同い年の16才。ほなよろしゅう」

「いやあ、久々に大帝国劇場に行こうとしたら迷つたなあ。ほんまここら辺は迷路やで。すーぐ新しい建物やらお店が出来るから暫く来ないでいるとぜーんぜん分からんようになるわ。でも八重はんに会えて良かつたでえ」

電車に揺られながら紅葉は八重に言う。どうも似たような名前の駅やら目印がわりの店で、グルグル変なところをさ迷つていたらしい。

「うち最近の店とかぜーんぜん興味ないからこの店を目印にうとか思つてもちんぶんかんぶんやつたんよ」

「相変わらず紅葉は機械弄りばっかりなのね」

なんて二人のやり取り見てから、ローアは電車の中吊り広告に眼を移した。

(ほうほう……ん?)

ローアはある方を見てから、静かに歩き出し、  
「ローアさん？」

八重が首を傾げる中、ローアは腕を伸ばすとそのまま男の腕を取つた。  
「おい痴漢野郎。そこまでにしな」

『つ！』

ザワツと電車内がザワツキ、視線が集まる。

「な、なんの事だ！」

「ちゃんと見たぞ、間違いない」

ローアはそう言うが、犯人？は首を横に振つて、被害者？の女の子に詰め寄る。

「おい！俺がやつたのか？どうなんだよ！」

「そ、それは……」

女の子は完全に萎縮。すると、

「俺も見たぜ」

「え？」

ああやれやれ、やつとここまで来れた。と人ごみを掻き分けて出てきた、身長2mは

「う、うるせえ！黙つてろ！」

そう言つて男はローアを振りほどくと、そのまま大男に殴り掛かるが、  
「よつ！」

パシッと相手の拳をキヤツチしてそのまま反対の手で拳を握ると、

「チエストおおおおおおおお！」

「ぐぎつ！」

脳天に拳骨を落とし、男はゴクシャ！と変な音を立てながら地面に潰れる。

「やれやれ、全く大丈夫か？」

「は、はい……」

女の子は震えながら頷く。それから大男はローアを見て、

「なあ外人さん。あんた良い奴だな。俺は桐島きりしま 蟲參らかん つて言うんだ。そつちは？ つて日

本語大丈夫だよな？ さつき日本語で話してたし」

「ああ、俺はローア・シャトーブリアンって言うんだ。あんたも……凄いな」

痴漢の男もさつきからピクピクと痙攣しているから死んではいないんだろう。なんて思つていると駅につき、駅員が入つてきた。

「お、来た来た」

誰かが次の駅に連絡してくれたのだろうか？ そう思いつつ蟲參と名乗つた大男は犯人を引つ張つていくと、

『ああ！』

「ん？お！八重に紅葉じやねえか！」

また知り合いか？そう思いつつローラは八重達に問うと、

「あ！もしかしてお前が新しいやつか！まさかこんなところで会うとは思わなかつた  
ぜ」

と、蠡參がアツハツハと笑うと、駅員に何故か蠡參の方が捕まり、

「あれ？」

「悪いんだけど君には少し話を聞かせてもらうよ。大男が電車内で暴れてるって言う通  
報が来てるからね」

「……」

何でじやあああああ！そう蠡參の叫び声が辺りに響く。

因みにその後八重達の説明もあつて、痴漢の犯人は捕まつたものの、犯人は病院送り  
になつてしまい、結局やり過ぎという事で警察にも厄介になつてしまい、最終的に撫り  
に迎えに来て貰う羽目になるのだが、それはまあ余談である。

# 犬猿？

「全く。貴方達と来たらやつてくれたわね」

『すみません……』

警察から無事解放され、ローア達は大帝国劇場に撫子につれられて帰ってきた足でそのまま支配人室に引っ張られ、説教を受けていた。

「まあ、今回は状況だけなら誉めてあげたいんだけどね。でも蠡參。貴方は馬鹿力なんだから少し加減とか覚えなさい」

「はい……」

ショボン、と2m越えの大きな体を蠡參は小さくさせていた。そこに、

「ちょっと撫子さん！蠡參さんがヤクザと大立ち回りをして全身に銃弾を喰らって病院にいつたつて本当ですかの!? 宜しければ神崎重工の力で世界的な名医でも……つてあら？」

『……』

血相を変えて飛び込んできたのはアツバだ。皆がびっくり眼まなこで見つめ、アツバは蠡參を目視して3秒ほど沈黙したのちに立ち姿を直し、

「あ、あら元気そうですね。蟲篆さん」

「んーまあヤクザと喧嘩なんてしてねえからな」

すると蟲篆の言葉にキツとアツバは睨み返す。

「は、はあ!? 人が心配して差し上げたんですからまずはありがとう心配かけたな、とかが先なんじやありませんの!?」

「ああ? そいつはどうも。だけどなお嬢様。普通そこまでの事態があつたらテレビでニュースになるしもつと大帝国劇場が慌ただしくなつてつづうの! どこでそんなコートームケーな話聞いたんだよ」

「噂になつてましたのよ! と言うか貴方は荒唐無稽もちゃんとと言えませんの!? 私より年上の癖に!」

「年上は関係ないだろ!? 別に言えれば問題ないんだよ!」

そうしてぎやいぎやい喧嘩し出す二人を、八重はため息を吐き、紅葉はケラケラ見て笑う。そしてローアは、

「あれつていつもなの?」

「ええ、あの一人すぐ気がつくと喧嘩するんですよ」

ほほう……そうローアは言いながら二人を見ると、

「嫌よ嫌よも好きのうちーつて奴だね」

『全然違（う）（いますわ）！』

蠡參とアツバはギロツとローアを見ると、ギャーギャー言いながら猛抗議……した次の瞬間、

「貴方達！いい加減にしなさあああああああああい！」

撫子の怒声が帝劇に響いたのは……まあ仕方ないだろう。

「やああああ！」

「はあ！」

コオーン！と帝劇の中に、綺麗な音が木霊する。

「いつてえええ！」

「はい、ローアさんこれで5戦中0勝5敗ですね」

ローアは八重に木刀で打ち据えられ額を擦り、八重自身は笑っている。

「ちえ～。もうちょっと行けると思つたんだけどなあ」

そう言いながらローアは、木刀を二本それぞれの手に持つ二刀流の構え。するとそこに、

「お？修行中か？」

「あ、蠡參さん。ええ、今ローアさんに……」

「隙ありいいいいいい！」

蠡參が顔をだし、八重が対応して隙を見せたところにローアが襲いかかつた。だが、「はあ！」

ローアの方を見ずに木刀横に振つて脇腹を叩く。因みにこういつた行為は八重が16歳と言う若さで、北辰一刀流免許皆伝の腕前を持つほどの天才剣士だからこそ、ローアに怪我をさせず、更に怪我をさせられることもなく行えるので、一般人は止めておいた方がいい。

「うぐうううううう……」

「お前不意打ちまでしてあつさりカウンター喰らつた挙げ句蹲つてるとかカツコつかねえなあおい。騎士道精神はねえのかよ」

「騎士道精神はイギリス。俺はフランス人だから違うよ蟲參さん……」

だが紳士の国ではあるだろ?と蟲參は笑つてローアの手を引っ張つて立たせる。

「しかしなんでお前らこんなことしてたんだ?」

「撫子さんに乗り手も鍛えた方がいいって言われたから……」

そう言うことか、とローアの返事に蟲參は頷く。光武は乗り手の力が反映される。つまり乗り手が強ければ光武もその分強くなるのだ。まあ勿論運転の技量も関わってくるが、腕っぷしが強いに越したことはない。

「でも素人が二刀流はキツくねえか?」

「私もそういうたんですけどローアさんが聞かなくて」

蟲參に反論したのは八重。八重もそれに関しては言つていたものの、青龍との時にガムシヤラになつた際にやつた二刀流が手に馴染んだのもあるのだが、

「だつて1本より2本のほうが強そうじゃん!」

『……』

ドーン!とローアは胸を張つて言い、蟲參と八重はため息をつく。正直二刀流はロマ

ン剣術の要素が強いのを、二人は分かつてているのだが、ローアが楽しそうな顔をしているので余り強く言えない。なので、

「分かつたローア。少し触るぞ」

「え？」「めん蠶參さん。俺そういう趣味は……」

は？と蠶參がジト目になる間にローアは安全圏に、

「アホかちげえよ！そういう意味じやねえ！」

「そうなの？」

「そうだよ！」と言いながら蠶參はローアの体を触ると、

「お前細いな……まず二刀流したいなら全体的に鍛えた方がいい。特に足腰はな必須だ。あと左を多めに鍛える。左右で筋肉量が違う。これだと二刀流やつたときにバランスが悪くなる」

「さ、触るだけで分かるの？」

「一応これでも琉球空手桐島流の継承者だぜ？あと俺、スポーツインストラクターとかもそつちの道も良いなって思つててさ、大学もそう言うの行きたいんだよ」

意外と既に将来の道は決めている蠶參に、ローアは思わず感心してしまう。いやまあ18歳の高校3年。決めていても可笑しくはないのだが、それでも関心してしまった。

そんな和やかな時間が流れていた時、

『つ！』

ビー！ビー！っと警報が鳴る。3人は互いに顔を見合させてから走りだし、帝劇内に隠して設置してあるダストシユートみたいな所に3人はそれぞれ飛び込むと、滑り台のように滑りながら、自動で服を脱がされ戦闘服に変わる。

そしてそのまま外に出されると、そこは帝劇の地下にある作戦司令室だ。

「皆集まつたわね」

既にそこには撫子や風組の4姉妹。そして舞やレミイにアツバと紅葉がいた。

「襲撃ですか？」

「はい！場所は東京スカイタワー。ですが前回の襲撃とは違い、今回は青龍と名乗った幹部の姿はなく、魔操機兵のみです」

ローアの問いに4姉妹のうち小春が機械を見ながら答え、

「それでは皆にはすぐにも東京スカイタワーに向かつてもらい、魔操機兵の擊破をお願いするわ」

「よつしや！久々に暴れてやるぜ！」

撫子が指示を出す中、蠶叅は燃えていたものの、

「あ、蠶叅はんの光武はまだ修理終わつとらんで」

「なにい!?」

「成程ね。蠶叡さんの光武は前の戦いで破損してたんだ」

「厳密には修理は終わつとるんよ。でも前に破損したのは、蠶叡はんの動きに光武が着いていけなくなつたからなんや。光武は乗り手の力が反映される。通常のチユーニングでは蠶叡はんの人間離れした反応速度や動きに光武が遅れてしまうんよ。そうなると段々エンジン系統に負担がかかつて……つてなつてまう。せやから今蠶叡はんが使つても大丈夫なように改良してる最中なんよ」

風来丸にて運ばれる中、ローアと紅葉は光武についている通信機でそんな話ををしてい

た。すると通信機に撫子からの通信が入り、

「さあ二人とも、雑談はそこまでよ。到着しだいすぐに出でもらうわ。ローア君武器はどう?」

ローアは撫子の通信を聞き、光武を操縦して、左右の腰に取り付けられた刀に触れる。

「はい。大丈夫です」

「光武にも使われとるウルトメウス鋼製の太刀二本つちゅう注文やつたけどほんまに二刀流でいくんか? ローアはん」

ダイジヨブダイジヨブ。とローアは笑い、風来丸が止まる。目的地に到着したようだ。

「さあ皆! 行くわよ!」

『おお!』

そして舞の号令を合図に、皆は光武を走らせるのだった。

「ふん……」

東京スカイタワーの天辺に立つ、虎の面をつけた大柄な男が地面を見下ろしていた。

その視線の先には、巨大なツボが設置され、周りには人々が倒れていた。  
「虚弱・軟弱・貧弱……どいつもこいつも弱すぎる。ん？」

「そこまでよ！」

すると突如ツボが撃ち抜かれ破壊。そして、

『帝国華撃団！参上！』

それぞれの武器を構えながら、ローア達は魔操機兵の前に降り立つ。

「まずは一般人の保護を優先。それと同時に魔操機兵の撃破。ローアと八重とアツバは前に！援護は私がするわ。紅葉はまだ攻撃はダメ。保護に専念して！」

『了解！』

舞が素早く指示を出し、それぞれが一般人を保護し始める。そこに魔操機兵が襲いか

かるが、

「はい！」

アツバは折り畳まれた薙刀を取り出し、変形させると薙刀で魔操機兵を倒す。

「ああもう！これじゃ保護も間々なりませんわ！」

「俺に任せろ！」

そう言うと、ローアはテレポートしてどんどん一般人を安全圏に引っ張っていく。

「こういう時も便利ですね！」

八重も魔操機兵を斬りながらそう言い、

「取り敢えずこんなもんかな」

「そうね」

とローアは全員避難させ、舞は魔操機兵を撃ち抜きながら頷く。だが、

『きやあ！』

「うお！」

上空から銃弾が降り注ぎ、全員なんとか回避。

『気を付けて！新型の魔操機兵よ！上空からマシンガンを撃つタイプのようね！』

「ならそろそろうちの出番やな！」

撫子からの通信を受け、紅葉は腕や両肩に取り付けられた砲身を上空に向けると、

「全弾発射！」

バシュバシュ音を立て、砲身からミサイルが飛んでいき、上空を飛んでいた新型の魔操機兵が爆発と共に破壊されていく。

「どうや！」

上空の敵を一掃し、紅葉はフン！と鼻を鳴らした。

「取り敢えずこれで良いかしら……」

舞は周りを見回しながら、そう言つて一息……だが次の瞬間。

「ふはははははははははは！流石に少し場慣れしたようだな。帝国華撃団！」

『つ！』

その場に響いた声に、皆は警戒態勢を取ると、

「人間どもの余りの貧弱さに嘆いていたが、少しほは楽しめそうだ」

虎の面をつけた男の登場に、ローアは眉を寄せ、

「その格好……もしかして青龍の仲間か？」

「おお！俺の名は白虎。黒華会四天王の一員にして四天王随一の喧嘩好きよ！」

そう言うが早いか、白虎は虚空から魔操機兵を出すとそれに乗り込み、此方に突っ込んできた。

龍を模した青龍のとは違い、全体的に大きく、全身が鋭利な棘等がついている白虎の

魔操機兵は、舞に突っ込む。

「くつ！」

舞は咄嗟に避け、銃を撃つがなんと白虎はそれを素手で弾いた。そこにレミイが入り、ランスで突く。

「おつと！」

それを白虎は掴んで止め、レミイをそのまま振り回してハンマー投げの要領で東京スカイタワーに叩きつけた。

「ぐつ！」

「レミイ！」

「行きますわよ！」

今度は八重とアツバが飛び出し、白虎を攻撃するが、2人の攻撃をスルリと避け、力ウンターを叩き込む。

「この！」

「ん？」

全員が離れたところに、紅葉がミサイルを撃ち込む。だが白虎はミサイルを避けながらその一つをキヤツチし、

「おらあ！」

「嘘やろ!?」

そのまま投げ返して逆に紅葉のほうが爆発。

「さあて、おい！お前か？青龍をぶつとばしたって言うやつはよ」「あ、ああ！」

ローアは刀を抜き、白虎に突撃。

「おもしれえ！来な！」

「おお！」

ローアは白虎に飛び込む……と見せ掛けテレポート。一瞬で白虎の背後に飛ぶと、不意打ちで一発！と思つたのだが、

「甘い！」

「がはっ！」

白虎はそのまま後ろにいたローアを蹴り飛ばし撃墜。

「なんだなんだ！ちつたあ骨があるかと思つたがこの程度かよ！」

白虎はそう言つて大きくため息を吐き、

「まあいいや、ツボ壊されちまうしこまでだな」

白虎はそう言つて空間を歪ませると、その中に入つていき、

「お前ら、もつと強くなつてくれねえと俺が楽しめねえんだ。頼むぜ？」

それだけ言って、白虎は静かに消えていくのだった。